

念死念佛—聖光上人のお言葉を伝える

- 浄土宗第二祖 鎮西大紹正宗国師聖光房弁阿弁長上人 筑紫上人 善導寺上人
応保二年(一一六二)五月六日(嘉禎四年(一二三八)閏二月二九日(七十七歳))

■参考図書

- ㊦『鎮西上人』青柳英珊 昭和七年 昭和五十三年
①『浄土仏教の思想』第十卷「弁長・隆寛」梶村昇 平成四年 講談社
⑦『聖光と良忠—浄土宗三代の物語』梶村昇 平成二十年 浄土選書35
⑤『聖光上人伝と「末代念仏授手印」』阿川文正 平成十四年 大本山善導寺
④『救いの教え』(第七章聖光上人のご生涯とその教え)阿川文正 平成二十五年 善導寺
⑦『現代語訳 聖光上人御法語集』柴田泰山 平成二十五年 大本山善導寺
④『浄土宗聖典』第三卷「徹選択本願念仏集」／第五卷「三卷七書」
第六卷「法然上人行状絵図」(四十八卷伝 第四十六上人の門弟四など) 浄土宗
☆『京都発見』四(聖光寺と四条京極) 梅原猛 平成十四年

言 【相伝 讃仰】

- ☆「正宗国師徽號勅書講説」法洲『大日比三師講説集 中巻』 (『二祖国師褒賞弁』)
☆「五重廢立鈔」貞極 『四休庵貞極全集 上巻』
☆ 講演メモ「鎮西上人御法語」柴田泰山 平成二十七年十月八日 熊本
知恩院布教師会地方研修大会 九州支部担当

●『選択本願念仏集』付属

《汝は法器なり、伝持に堪えたり。早く此の書を写して、末代に広むべし》

(『四十八卷伝 第四十六』)

《ここに、弟子某甲、低頭挙手し合掌恭敬して跪いて以つてこれを賜わり畢んぬ。歡喜身に余り、随喜心に留まる。伏して以れば報じ難く、仰いで以れば謝し難し。ただ義理を口決に伝うるのみに非ず、また造書を眼前に授けらる。》

(『徹選択本願念仏集』)

●鎮西相承一枚起請文 (『和語灯録「諸人伝説の詞」』(『善導寺御消息』昭法全四三四))

《我大師釈尊は、ただ法然上人なり》

(『四十八卷伝 第四十六』)

《釈尊の御説法を聴聞するがごとし》

(『法然聖人絵(弘願本)』)

《上人、伝法の志し、予れに深きを知り、涙を抑えて、走り参りたりき》

(『決答授手印疑問鈔』)

《故上人常言云、我烏帽子キ又法然房也。黑白不知童子如是非不知無智者也。只念仏往生仰信。釈迦念仏往生セヨト勸、弥陀念仏セヨ来迎仰ラレタリ。此一事情余事不知。而我等法然上人奉信、法然上人奉信善導、善導奉信釈迦弥陀給。》

〔西宗要〕

* 吉水流詠唱一 『二祖鎮西上人鑽仰和讃』(藤堂俊章大僧正)、『善導寺和讃』(阿川文正台下)、『善導寺の御詠歌』(二田善寿大僧正)、『鎌倉光明寺の御詠歌』(良忠上人)

三 【手がかりとする語】

* 「阿波の介が申す念仏と源空が申す念仏」〔四十八卷伝 第十九〕

末代念仏授手印の序

六重二十二件 (五種正行・正助二行・三心・五念門・四修・三種行儀)

五義引証―五義を出して「一心専念」の文を説明

結歸一行三昧

《釋して曰く、我が法然上人の言わく、善導の御釈を拝見するに、源空が目には、三心も五念も四修も皆ともに、南無阿弥陀仏と見ゆるなり。》〔末代念仏授手印〕

五種増上縁 (滅罪・護念・見仏三昧・摂生・証生) : 善導『觀念法門』

不離仏・値遇仏 念仏三昧 念死念佛

《仏を離れざるが故に仏を忘れざるなり。仏に値遇するが故に常に仏を念ずるなり》

〔徹選撰本願念仏集〕

参 【念死念佛】

《先師の云く、經論の中に六念八念九念を明かすと云えども、我が如くはただ念死念佛の二念にありと、教示せられ候いき。此の一言千念よりも重し。実に此の二念を常に思わんに過ぎたる事あるべからず。

念死というは終に遁れぬ死を思いて、出る息、入らんことを馮まざるなり。念仏と云うは仏の御力と馮もしきを思い出て、最後の引接を待つべきなり。

北芒の露の何れの日か消えん、西土の臺その時を期す。》

〔浄土大意抄〕「念仏者常の意得の事」後編第二十六

《先師弁阿曰く、經論の中に菩提のおもふべきようをあかすに、六念八念十随念とてさまざまありといへども 我がごときは、ただ念死念佛の二字にありと。此の一言千念よりも重し。まことに此の二念をこころにかけたらんに過ぎたることあるべからず。念死といふは終に遁れぬ死をおもひて、出る息の入らんことをたのみぬなり。念仏といふは仏のちかひのたのもしき事をおもひて、口に南無あみだ仏と申すべきなり。北芒の露といつか消えて西土のうてなにその時を期すべき。此の外に別の奥ふかき事なし。是れもし虚言ならば三宝の御罰あるべく候なり。

をしへおく このことのはのゆく末を おもひわすれず われをとぶらへ

文永六年八月二十九日

良忠 在判
〔新撰往生伝〕

《聖光上人云わく八万の法門は死の一字を説く。然らばすなわち、死を忘れざれば八万の法門を、自然にこころえたるものにあるなり。》

〔一言芳談〕 後編第二十七

《つねに述懐には、人ごとに閑居の所をば、高野・粉河と申しあえども、我が身には、あかつきのねぎめのところにしかずとぞおもうと。

また安心起行の要は、念死念佛にありとて、つねのことわざには、出る息、入る息をまたず、入る息、出る息をまたず、助けたまえ阿弥陀ほとけ、南無阿弥陀仏とぞ申されける。》

〔四十八巻伝 第四十六〕 後編第二十九

☆『メメント・モリ』藤原新也 昭和五十八年 情報センター出版局

☆スタイーブ・ジョブズのスタンフオード大学卒業式スピーチ 2005 平成十七年

☆『死の文化を豊かに』徳永進 平成十四年 筑摩書房

『本当の死が見えないと、本当の生も生きれない。等身大の実物の生活をするためには、等身大の実物の生死を感じる意識をたかめなくてはならない。死は生の水準器のようなもの。死は生のアリバイである。』

MEMENTO - MORI

この言葉は、ペストが蔓延り、生が刹那、享樂的になった中世末期のヨーロッパで盛んに使われたラテン語の宗教用語である。その言葉の傘の下には、わたしのこれまでの生と死に関するささやかな経験と美感がある。』（藤原新也）

『人生を左右する分かれ道を選ぶとき、一番頼りになるのは いくつかは死ぬ身だと知っていることです。人生には限りがあります。他人の人生を生きることとで無駄にしないでください。』（スタイーブ・ジョブズ）

『「一の言葉」…近代語で抽象的な言葉 机上の言葉、マスコミ語、標準語
コンピュータや機械の近くにある

『「二の言葉」…原始語で具体的な言葉 生活の言葉、方言
動植物や自然や暮らしの近くにある

『「一の言葉」にいのちはなく、「二の言葉」はいのちを含んでいる。

日本の死の文化がやせ細ってきているのは、「二の言葉」を忘れ、全てを「一の言葉」だけで対処しようとしているからではないか、と思う。

『死』という言葉そのものが「二の言葉」の中の宝物的存在なのに、そのことをぼくらは忘れすぎてはいまいか。』（徳永進）

『春風の朝、秋雨の夕 「念死念佛」の碑に接し、人生の無常を自覚し、称名念佛不断なれば、勝縁勝境悉く現前せんことをまたず。酷暑の夏、厳寒の冬 「念死念佛」碑を縁とし、益々信根を増上し、聖胎を長養し、家門の清福と子孫の昌栄を期し、二世の大願を成就せんことを』（長徳寺「念死念佛」碑除幕式における大本山善導寺法主藤堂俊章大僧正の表白 平成三年三月）